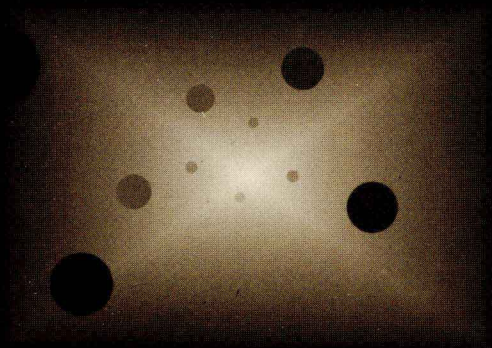


近代のトポグラフィー

Severin Müller
TOPOGRAPHIEN
DER MODERNE

Philosophische Perspektiven
literarische Spiegelungen

哲学的遠近法と文学的反映



セヴェリン・ミュラー
武居忠通訳

セヴェリン・ミュラー

近代のトポグラフィー

—哲学的遠近法と文学的反映—

武居忠通 訳



創文社

まえがきと日本の読者へのご挨拶

私の著書、『近代のトポグラフィー。哲学的遠近法と文学的反映』の日本語訳をここに刊行し、日本の読者の皆さんに提示できる運びになりましたことは、私の大きな喜びです。本書は、私の書き溜めてきた論文の中から特に選んで編集したものです。全体の標題は何を意味しているでしょうか。私はこの名称にどんな意図をこめているのでしょうか。長年の友、大橋良介氏（独訳された氏の著作は当地では大きな関心をもつて読まれている）との多くの啓発的な対話は私に、ある決定的な認識を与えてくれました。それは結局氏の『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』（新潮選書、一九九二年）によって仲介されたものでもありました。それは何かというと、〈「近代一般」は存在しない、あるのは「特定の近代」だけだ〉、というものです。氏の『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』は、魅力的な分析と印象的な見通しで、ある独立した近代、独自に発展した近代——つまり「日本の近代」の模範的全体像を発見しています。氏の著書は、そのようにして、近代性の真の形式の全体的表現を展開しています。その記述から明らかにするのは、近代性のヨーロッパ的考え方自体が一つの特例だということですから。だとしたら私のこの著書は、「ヨーロッパ近代のトポグラフィー」という標題を付けなければならないでしょう。

『トポグラフィー』という標題は、読者の皆さんに何を伝えようとしているのでしょうか。『近代のトポグラフィー』は、ここに集められた論文が、その中に立っている関連を、ここに選ばれた論文全体が形成している一つの関連を指示しようと

しています。「トポグラフィ」とは、「土地の記述」を意味しています。「土地の記述」には——「序説」で詳細に論じておきましたが——ある「土地」の生活に必要で重要な所与を把握し、規定し、表現するという意図があります。「トポグラフィ」は、ある「土地」とその生活空間を本質的に条件づけ、その形態を決定的に形成する事情と関連に向けられます。私の本の諸論文では、特殊哲学的な事情と関連が論議されていますが、諸論文は同時に特定の事情と関連を哲学的検討のもとに、すみずみまで解明することを意図しています。それがヨーロッパ近代の形態にとって、その理論的特徴にとって、その知的意識にとって決定的だと私が推測するような事情と関連こそが問題なのです。論議は二重の思考方向に従っています。一方では、——これは多元性の現象ですが——この「近代」の本質的特徴とみなされる事情と関連が扱われています。その分析は今まで注意を払われなかった観点を明らかにしようというものです。他方ではしかしながら諸論文は、——これは労働、技術、自然への問いかけですが——それ自身から、その特徴において、「ヨーロッパの近代」への特別の認識を可能にする事情と関連に捧げられています。

「ヨーロッパ近代のトポグラフィ」は、精神の地図をスケッチすることを意図しています——ヨーロッパ近代の権威があり顕著な、偉大さと不動の名声とをもつ思想家たちの何人かによるヨーロッパ現代の地図です。このようにして、このトポグラフィにとっても、すべての「土地の記述」にとって通用する一つの観点が重要になってきます。つまりそれは、「土地の記述」においては、その「土地」は踏破され、走破されなければならないということ、だから経験されなければならないということです。トポグラフィは、経験に基づいています、それは経験を自身の中に抱え込んでいます、それは経験を思い描かせます。「土地の記述」と「経験」の関係にとっても同様に次のことが言えます。つまり、ある「土地」とその記述の経験においては、様々な道路が敷かれ、様々な異なる交通施設が建設され得るならば、その土地は、様々な異なる方向に向かって、違った道や街道、異なる通路を通じて踏破され、走破されることが出来ます——それらすべての道と通路を辿って移動して行く眼の前に、その「土地」は様々な異なる風景を展開しながら、次々と現れて来るのです。このようにして、現代の多元性の現象は、様々な哲学的解釈によって論議されます。そしてそれらの解釈は、現代の多元性の現象を第

一に、「自己保存」の問題との関連の中で検討整理し、第二には「力」との関係の中で、第三には、「世界」とそのプロセス性の理解との関連の中で検討整理します。それと並んでこれらの論究は、「多元性」についての、「自己保存」についての、「労働」についての、また「自然」と人間の関係についての哲学的構想が、それ自体のうちに抱えている、考えられる経験は何かを問いかけます。ここに集められた諸論文は、このような注視方向において、その都度、この「近代」の理論的確信と構想をその構造と関連において明らかにし、加えて、しかしながらその根本的な、見極め難い経験を説明しようと努めています。このような経験は、哲学の領域においてだけでなく、文学の領域においても同様に追求されます。ベルト・ブレヒト、ジュール・ベルヌ、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、アルノ・シュミットは、彼等のテキストで、「ヨーロッパの近代」を決定的に刻印している、そのような経験の本来的表現となるドキュメントを差し出しています。

ここに提示された諸論文はむろん特定の事情、現象、問題だけを論じているわけではありません。これらすべての論文においては、その都度特定の哲学者が語られます。つまり論究はライプニッツとホッブス、ニーチェ、カント、デイドロ、ドルバック、マルクス、——そしてついにはハイデッガーにまで向けられます。ハイデッガーは、この「近代」の決定的な思想家として見て貰わなければなりません。しかしそのほかの思想家たちとの関連は、ある本来的意図に従っています。即ち彼等によって、「ヨーロッパ近代のトポグラフィ」はその焦点深度を獲得するはずですが、もしその深層次元が開示されることになれば。この関連においては、「トポグラフィ」は「考古学」に変わります。それは特定の起源の歴史、成立史を説明しようとしています。ホッブス、ロック、ライプニッツを振り返ること、カント、デイドロ、マルクスを回顧することは、本質的に近代的な一般原理の根源が、どれほど遠い過去のものであるかを明らかにします——これらすべての思想家たちはその発生の範囲内にある「ヨーロッパ近代」の根源と出所を証言しています。このようにして、ニーチェを振り返ることは特別の意味で重要になります。彼は「ポストモダン」の最初の思想家と見做されます——だとしたら「ポストモダン」は「モダン」以前に始まったのでしょうか、ニーチェにおける「ポストモダン」は、「モダン」とこれが展開される以前に別れを告げているのでしょうか。このような見方においてニーチェへのまなざしは何はさておき、最終的に次のこと

を明らかに示します。「近代」は、「ポストモダン」をめぐる論議がそれに認めているよりも、もっと多くのものをそれ自身の内部に抱え込んでいます、もっと深いところにまで溯っています、もっと遠く未来へと走りぬけています。

ライプニッツとロック、ダランベールとカント、デカルトとパスカルを想起することによって、もちろん、近代の思考と近代の知性の、様々に相違する起源が明らかになるだけではありません。思想家たちの多様さは、更なる認識に通じています——思想家たちの多様さは、ヨーロッパの近代自体にとって本質的意味を獲得するのです。これらすべての思想家たちは、その哲学的営為とその成果において、それぞれ独自の「土地の記述」を展開しています。彼等は各自独特な、世界と現実の全体的トポグラフィーを提示しています。これらの哲学者たちの多様さは、彼等の理論の多様さとその「近代」への影響力の多様さにおいて、次のことを証言しています。即ち、「近代」はひとり「ロゴス」にのみ依拠しているのではなく、互いに極めて相違しあう幾つもの根本規定に従っているということです。「ヨーロッパ近代」の「トポロギ（場所・学）」が存在するのではなくて、「幾つものトポロギ（場所・記述）」があるだけなのです。「ヨーロッパの近代」は、——その多元性において、その規定と経験の複合性において——異なった幾つもの通路においてのみ、探索されることが可能です。もちろん「土地の内部の」探索とその「土地の記述」の多様な営為が、執拗かつ切実に、注意深く、醒めた精密さで行われるべきだというのであれば、次のことが不可欠になってくるように思われます。つまり、自分自身のものへのこのようなまなざしは、「国境」を越える視野を必要とします、そのまなざしは、他の国々とそのさわやかで光に満ちた遠方への旅立ちと渡航を要求しています。

最後に感謝の言葉を述べたいと思います。だれよりもまず長年の友人、対話のパートナーである大橋良介氏に、私の深甚なる幾重もの感謝を捧げます——氏はこの『トポグラフィー』の、日本語版への道を拓き、その翻訳出版を可能にしてくれました。東京の創文社にも心よりお礼の言葉を申します——このような企画でこの書が出版されましたことを私は非常な名譽に感じております。最後に翻訳者武居忠通氏への大きな感謝を。彼がこの『トポグラフィー』の翻訳に注いでくれた、テ

まえがきと日本の読者へのご挨拶

クストに取り組むその忍耐力と知識、その入念さと能力には、感嘆あるのみです。

一九九四年二月

セヴェリン・ミュラー

凡 例

- 一 本書は Müller, Severin: 'Topographien der Moderne. Philosophische Perspektiven — literarische Spiegelungen. 1991' の全訳である。
- 一 訳文中、イタリックによる引用文は、「」で示し、書名は『』で表示した。 ” その他による強調は傍点にした。
- 一 「アルノ・シュミット」論文のゴチック活字は原文では大活字で、この作家自身の活字指定。
- 一 原注は、(1)、(2) で示した。原注が圧倒的に多いので、訳注は最小限にとどめた。訳注は、() 内に小活字で表示した。その他 () 内の普通活字は原文通りである。() 内の引用符は「」で示した。
- 一 巻末に、比較的详细な人名索引を掲載した。

目 次

まえがきと日本の読者へのご挨拶	v
凡 例	xi
序説 土地測量の悲惨	三
第一部 多元化、支配、想像力…近代への移行の中で	二
自己保存と「力への意志」 ホップスとニーチェにおける一つの問題関連の類型学と結果としての重荷	二
遠近法思考の力——秩序の遠近法 ライプニッツとニーチェにおける世界の多元性	三
世界のプロセスと『バベルの図書館』 ニーチェ、ヒューム、ボルヘス	二五
第二部 労働、技術、自然…前史の諸相	
知覚の鏡に映して…行動と労働 ベルトルト・ブレヒトにおける弁証法	一五
啓蒙主義の地平で…労働と技術 デカルト、ロック、ダランベール、デイドロ、カント	一九
万有には言葉がないということ 経験の歴史の幾つかの位置 (パスカル、デイドロ、カント、	
ドルバック、ネモ船長)	二三
自然の全関連と自由の次元 『経済学哲学草稿』における「世界」	二五

第一部 多元化、支配、想像力…近代への移行の中で

2 生の普遍性と情念性……力への意志……………四

遠近法思考の力——秩序の遠近法 ライブニッツとニーチェにおける世界の多元性

序論

I 遠近法思考と方向づけの現代的多元性

1	ライブニッツの出発点で…構造を与えられた見通しと複合的総体	七
2	シュペングラ―を拠り所として…動機づけと方向づけ	三
3	ニーチェへの見通しの中で…多様性と闘争性	五
II ライブニッツ…遠近法の合理論と秩序		
1	モナド…実体、プロセス、表象の統一	七
2	意識性…表象と序列	六
3	多元性…関係の全体性と関係の宇宙	三
4	遠近法思考…トポロギーとコミュニケーション関連	六

3	「力への意志」…運動の構造と制約状況	四
4	自己投影、投影された統一、投影された制御	四
5	制御、貫徹、高まり…多元性と個性	四
6	自己投影と虚構性	五
7	幻想の世界…「力への意志」と短縮された生	六
8	「力への意志」と「永劫回帰」…短縮された生と失われた時間	六

2	「意志の句読法」と「遠近法学説」…活力ある現実存在の多元性	104
3	「力の中心」の多元性…遠近法の闘争性	107
	結論	110
	世界のプロセスと『バベルの図書館』 ニーチェ、ヒューム、ボルヘス	115
	序論	115
I	ニーチェ…世界の周期と「組合せ」の循環	117
1	正当性弁証と個人的遠近法…出発点の諸条件	117
2	唯一性、完結性、変動性…枠となる諸規定	119
3	永劫回帰…「組合せの戯れ」——宇宙論的な規定領域	121
II	ヒューム…循環——秩序の没落と回帰	124
1	物理目的論と懐疑論…批判的文脈	124
2	有限性、持続、変動性…それを可能にする諸条件の連続性	125
3	物質、秩序、恒常性…別の規定経路	127
4	永続性と崩壊…「秩序」の位置と機能	130
5	崩壊、カオス、偶然…秩序の回帰としての循環	133
6	ヒュームとニーチェ…同一性と批判的差異	134
III	ボルヘス…同一性の妄想と反復の単調さ	135
1	「バベル」での世界建設…凝固した静止状態の対照物	135
2	「組合せ」の宇宙の中で…経過の記憶	138

第二部 労働、技術、自然・前史の諸相

知覚の鏡に映して…行動と労働 ベルトルト・ブレヒトにおける弁証法……………

討論の多様性……………

I	眼なごしの遠近法と意識の弁証法……………	一五九
II	縛られた意識と文脈における行動……………	一六三
III	引き裂かれた意識と労働の実践……………	一六九
IV	労働の実践…匿名と歴史……………	一七七
V	科学の実践と否定弁証法……………	一八四

3	「組合せ」と帰化…無意味なものの宇宙の中で……………	一四一
4	永遠の反復…人間の不可能性……………	一四四
IV	もう一度ニーチェ…帰帰——同意を凌駕するものなし……………	一四六
1	急進化した変動性…規定領域の交替と問題提起の変化……………	一四六
2	対立の統一…「力への意志」と包括的肯定……………	一四九
3	世界の充溢と事実性…永劫回帰……………	一五二
4	永劫回帰…肯定と同一性のモデル……………	一五三
5	永劫回帰…経験、創造力、否定された時間……………	一五四

啓蒙主義の地平で…労働と技術	デカルト、ロック、ダランベール、デイドロ、カント	一九七
I	カントの光学の中で…ただ自身の理性によって	一九七
II	デカルト…幾つかの発端、仮決定、先取り	二〇一
1	自然の開発…知の実用志向と技術	二〇一
2	労働の分担と機械の遠近法	二〇四
III	ロック…認識の労働的性格と感性的なものの秩序の必要性	二〇五
1	認識の発生、悟性の自己開発	二〇五
2	秩序としての労働と技術	二〇七
IV	百科全書の周辺で…根本的決定の展開と高まり	二〇九
1	ダランベール…自己保存の優位と知のプログラム	二〇九
2	デイドロ…労働と技術——自然と精神への刻印	二一三
V	カント…先験的主観性の労働	二一六
	万有には言葉がないということ	
	経験の歴史の幾つかの位置（パスカル、デイドロ、カント、ドルバック、ネモ船長）	
	序論	二二三
I	パスカルとカント…宇宙の測り知れなさと孤立したヒューマニティー	二三八
II	デイドロとカント…自己遂行と人間化した自然	二二三
III	ドルバック…人間の無庇護性——同化の限界	二三七
IV	技術に焦点をあてて…自然の運命	二四一

結論	二四八
----	-----

自然の全関連と自由の次元 『経済学哲学草稿』における「世界」	二五三
--------------------------------	-----

序論	二五三
----	-----

I 自然の全関連…世界の規定の基本的形姿と発端の形姿	二五四
----------------------------	-----

II 人間の中間的位置と労働の調停的働き…世界の生産	二五八
----------------------------	-----

III 自由の全関連…社会としての世界	二六〇
---------------------	-----

結論の遠近法	二六三
--------	-----

第三部 多元性、経験、理性…近代の不完結性

現存の力の中で マルティン・ハイデッガーにおける「存在の歴史」の問題	二六九
------------------------------------	-----

序論	二六九
----	-----

I 最終的規定としての「存在」…現実的なものの現存	二七四
---------------------------	-----

II プロセスとしての「存在」…先開示状態	二七七
-----------------------	-----

III 「存在の歴史」…先開示状態と脱離	二八一
----------------------	-----

IV 先開示状態…合意性と眩惑	二八四
-----------------	-----

V 先開示状態…脱離と多様	二八六
---------------	-----

VI 眩惑…主観性と支配	二九一
--------------	-----

VII 対となるもの…弱さと労働	二九五
------------------	-----

VIII	存在の歴史、性起、回想…開示と消失	二九
IX	瑣事拘泥と視野の空間	三〇三
	アルノ・シュミット『危険の海と片田舎』——望遠鏡による経験と顕微鏡による経験	三〇七
	序論	三〇七
I	正常であること…もう一つの意識の現象学	三〇
II	田舎の生活…退屈と穴だらけの生活	三三
III	月の住人たち…欠乏の陳腐さと亡命の終末性	三七
IV	月の生活…退化とアルカイク様式	三三
V	肉体の記憶…諸秩序間の対立の中で	三八
VI	無の地平で…穴だらけの庇護性と島のような存在	三三
VII	「では役立たずの老人たちは？」…理性の脆弱さとその必要性	三八
	「環境」別の理性の必要性	三四三
	帝國的同一性の彼岸で——運動の理性と想起の理性	三五三
	相剋の中の理性	三五三
I	思考様式の多様性と帝國的理性形態	三五六
1	「理性」、「理性的」…前提となる合意	三五六
2	訣別された普遍性	三五七

3	論争的複数化	三六
4	複数化・限定された総体性	三九
5	限定された総体性・帝國的理性	三〇
6	帝國的理性・唯一性、排他性	三一
7	想起・現実的なものの相違	三二
	帝國的理性と世界内の統一形態	三三
1	理念・トポロギーとしての方向づけ	三三
2	理念・先験性と投影	三四
3	同一性、静的状態・脆さ	三五
4	脆さ・自己解明、自己提示	三七
	現象学的理性・多元性と変動性	三八
1	普遍的先験性と投影	三九
2	ア・プリオリの無限性と変動性	四〇
3	「極組織」・再帰の同一性	四二
4	モデルとしての曖昧性	四三
	多様な記憶・世界の複合性と通路の理性	四四
1	肉体の記憶・世界状況	四四
2	運動のイメージ・様々な通路	四五
3	要請・普遍性、論理整合性、拘束力	四六
4	位置意識・位置のトポロギー	四七